日本景観フォーラム会報　第 56 号　　発行日　2025 年 1 月

景観フォーラム

巻頭言

戦争をすることによって政治家としての命運を維持し、長く政権に居座るという政治家はこの世界にはうようよと生きている。現在、戦争犯罪者として指名手配されているプーチン(1952-)はともかく、もう一人イスラエルのベンヤミン・ネタニヤフ(1949-)である。戦争は彼らが政権を維持するための重要な手段であるがため、彼らが政治家として活躍するということは、戦争を継続するということである。彼らにとって政治を実践することは戦争を実行するということに等しい。

このような政治家を頭に据えている国の民衆は不幸である。これらの国の GDP は戦争によって活性化しているはずであるが、それは国民の命と引き換えにするということであるから、まったく、とんでもないことである。が、このような状況が長引くと、現在のロシアとイスラエルのように、国民は戦争を実施していることが常態となっているが故に戦争は政治の一つとして国民の常識となってしまう。政治を語ることは戦争を語ることに等しい。恐らく、これがロシアとイスラエルの民衆の常識と化しているのではないだろうか。不幸なことだ。

そして、またもや愚衆政治の典型としてドナルド・トランプ（1946-）が返り咲いた。およそ百年前の事ではあるが、ヒットラーも民主主義によって選ばれた人物である。だが、当時のドイツ国民はまさかあのような歴史を歩むとは考えてはいなかったであろう。この現象を世界はどう捉えるべきであろうか。もしかしたら、第三次世界大戦が勃発してしまうのか。それとも、あの中身の全くないトランプ節で、次の 4 年間を過ごしてゆくのか。いずれにせよ、ウクライナという美しい国を未だに破壊し続けているプーチンは近い将来新たなロシア革命によって倒されるであろうし、もしかしたら、暴力を正義としているネタニヤフそして独裁政治をひた隠しにしているトランプ両人は本来の正義という刃によって海の藻屑となるであろう。戦争のない世界、今年こそはと思ってはいたが、晴れやかな空に向かって謹賀新年と申し上げるのは来年になるだろうか。この狭い世界から戦争が無くなっていることを念じながら、「良き景観を考えることは、善き民主主義を作り上げることである」と申し上げたい。

NPO 法人日本景観フォーラム理事長　斉藤全彦

＜日本景観フォーラム 2024 年度年間スケジュール＞

＊2024 年度とは 2024 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日のことです。

2024 年

4 月 23 日（火）**第１回景観研究会**　総会・第１回理事会（18:00～20:00）於：JICA オフィス
5 月 12 日（日）**第１回景観まちあるき**【アークヒルズ】
6 月 25 日（火）**第２回景観研究会**（18:00～20:00）　於：JICA オフィス
9 月　7 日（土）**第２回景観まちあるき**【代官山】
9 月 24 日（火）**第３回景観研究会**（18:00～20:00）　延期
10 月 21 日（月）**第３回景観まちあるき**【洗足池】
11 月 8 日（金）**第３回景観研究会**（14:00～16:00）　オンライン会議
11 月 19 日（火）**第４回景観研究会**（18:00～20:00）　オンライン会議
12 月 26 日（木）**忘年会**【恵比寿】中止

2025 年

1 月 7 日（火）新年会【目黒】ゆう月（18:00～）
1 月 25 日（土）**第４回景観まちあるき**【麻布】
2 月 18 日（火）**第５回景観研究会**（18:00～20:00）　於：JICA オフィス
3 月 22 日（土）**第５回景観まちあるき**【大山】

■以上のスケジュールは、ご提案ですので随時皆様のご意見を反映してまいります。

＜日本景観フォーラム 2023 年度 年間実績＞

2023 年

4 月 24 日（月）**第１回景観研究会**　総会・第１回理事会（16:30～ オンライン会議）
5 月 30 日（火）**第２回景観研究会**（16:30～ オンライン会議）
6 月 13 日（火）**第１回景観まちあるき**【浦賀】
6 月 20 日（火）**第３回景観研究会**　於：JICA 研究所 18:00～
9 月 30 日（土）**第２回景観まちあるき**【品川東海道界隈】
10 月 27 日（金）**第３回景観まちあるき**【三ノ輪】
11 月 28 日（火）**第４回景観研究会**　於：JICA 研究所 18:00～
12 月 19 日（火）**忘年会**（東京、中野にて実施）

2024 年

1 月 19 日（金）**第４回景観まちあるき**【逗子】
2 月 20 日（火）**第５回景観研究会**・第２回理事会　於：JICA 研究所 18:00～
3 月 17 日（日）**第５回景観まちあるき**【両国】

自由が丘駅前再開発の工事場景観

豊村泰彦

東京、神奈川、千葉、埼玉などの首都圏では今、駅前の再開発が盛んである。私の住んでいる目黒区やそれに隣接する地域もここ数年で駅前景観がどんどん変化している。目黒駅から日吉駅を結ぶ目黒線も地下化に伴って 20 年くらい前から駅舎とその周辺の雰囲気は変わってきたが、駅前風景にはそれほど大きな影響はなかった。しかしこの 10 年は高層マンション建設と一体に進められる駅前再開発が活発化しており、駅周辺の商店街にも影響を及ぼしている。今年は武蔵小山に続いて隣の西小山駅にも飛び火し駅側に 14 階建てビルが建てられた。さらに 2026 年には東急線自由が丘駅前にもマンションや商業施設などが入居する地上 15 階建ての複合ビルができる。すでに既存建築物の解体工事が終了し建築予定地はフェンスで囲まれ、現在重機や基礎工事のための材料が次々と運ばれている。これから私たちは 1 年と数か月間自由が丘駅西口で白いフェンス越しに地域の顔となる高層ビルを眺めるのである。そこで、まず自由が丘駅の変貌のスタートとなるフェンスとその周辺の景観（2024 年 12 月現在）を観察してみよう。

●自由が丘デパート

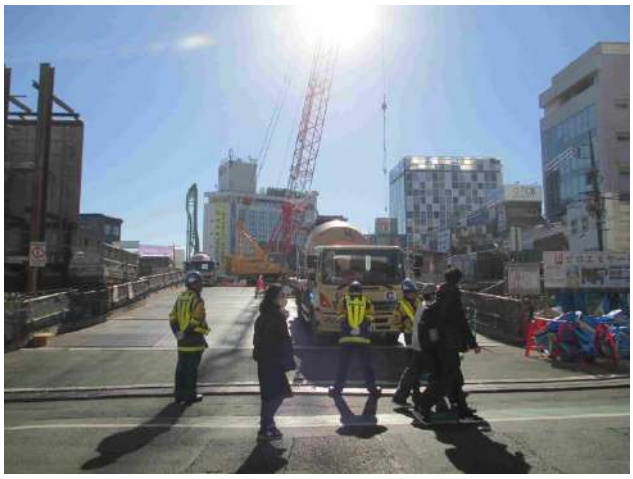
1953 年（昭和 28 年）に開業された自由が丘デパートは日本に初めて「デパート」という名称が付けられた商業施設として知られている。今年渋谷駅で解体された東横百貨店は、1934 年創業と 10 年近く古いが、デパートとは言わず百貨店と呼んでいたので、やはり自由が丘デパートは当時としては最先端を走るモダン施設だったようだ。その左側（西側）が駅前再開発エリアとなり、フェンスで区切られている。

●駅から西側のフェンス（塀）

●フェンスの向こうが駅前ロータリー

フェンスに沿って時計回りに歩く。すると駅の方角に地上九階建ての東急プラザビルが見える。駅前周辺のビルは高さはせいぜい 5，6 回階建てで高層なビルがほとんどないため大きく見える。また、この辺はいつもだと車の往来も多いのだが、今日は少ない。再開発が終わるまではこのようなものだろうか。

●あの自由が丘とは別世界



●大型重機の搬入門

なぜ自由が丘の顔ともいうべき駅前の再開発に踏み切ったのか。もちろん建物の老朽化も大きな要因だが、かつての自由が丘の「しゃれた街並み」を取り戻そうというねらいもあるようだ。計画では商業空間やオフィス空間の上部に 15 階建ての高層マンションを建てる予定だという。商業空間＋オフィス空間＋高層マンションの方式は今や駅前再開発事業の定番となっており、昨今の首都圏でのプロジェクトのほとんどがこの方式なので、こうした中で、自由が丘がどのような独自性をもって「おしゃれ」な街のデザインをつくっていくかも見ものである。

●左がデパート右がフェンス

●フェンスの色は何色がいい？

フェンス自体は美しいとは言えない。白のフェンスは目隠が目的の単なる道具であるので、フェンスは景観にとって邪魔者である。これがあると、短期間とはいえ数年間ここを通る通行人の視界には否応なしに入り、不快な気持ちになる人がいるかもしれない。そこで、気に食わない人のためにそこに何か壁に描いたらどうであろうか。海外では壁に描く絵やデザインはアートとして市民権を得ているところもある。そのような自由はアートだからできる（とは限らないが）。

●デパートの前を通る人たち

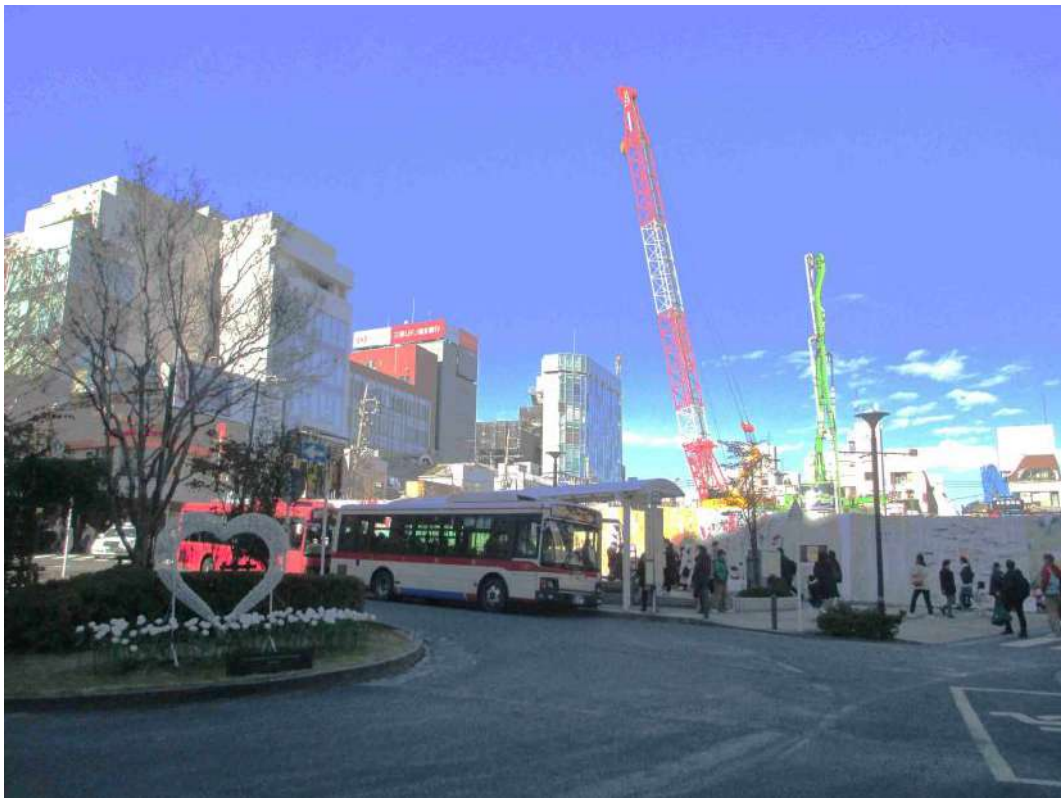
●フェンスの前で路上ライブ

駅の周りには少しずつアートっぽい雰囲気もでてきた。フェンス前で路上ライブをやっている一団もあった。。演奏者が出現するきっかけという点でも、なにかアートが自然発生する土壌があるのだろうか。それが自由が丘の「オシャレ」イズムを作り出すきっかけになるのだろうか。2026 年 7 月に竣工を迎えるがどんな自由が丘駅になるのかたのしみである。

●駅に行く人たち

●最後に

今回の自由が丘もそうですが、まちを活性化するために、いろいろな手法が提案されています。わたしたちこれからどうしたらよいでしょうか？再開発をすることで街は活性化しますか？商業と生活を集中した高層マンション付きの街（場所）は本当にいいのですか。それはどこのまちでも同じようによいのですか？都心から郊外に広がっていますが、結論が出るのは相当先になりますが、同じパターン（生活、住宅、住まい方）でいいのですか？かつて公団住宅がたくさんできて、老朽化などで改築されていますが、景観的にも住みやすさから言っても昔の公団住宅は好いと言っている人はいっぱいいます。。そういうものを改装したり、修理したりして残しておこうという声は日本ではあまり聴かれません。欧米などでは 100 年前の住宅などに普通に暮らしてます。どうして日本ではダメなんですかね。考えてみませんか？。



●自由が丘駅前

佐渡島・宿根木の町並み景観

石見茂夫

新潟県佐渡市の宿根木は中世の頃から廻船業を営む人達が居住し栄えた集落であった。
隣の小木港が江戸幕府によって整備され商業の中心が小木に移ると宿根木の人達は全国に向け商業船を乗り出した。村には船大工を始め造船関係の人達が多く居住する様になり、千石船の基地として整備され北前船の寄港地の近くに有る港町として繁栄した。
北前船の船主や船大工が多く居住していたので他の港町とは違った趣を持っている集落である。
宿根木の住居の外観は板張りで質素であるが内部は漆塗り等で仕上げられ豪華な造りとなっている。
集落は佐渡島の西南部にある集落である。南に面した入江の背後は海岸段丘に成っている。

宿根木の概要

宿根木とは

1. 佐渡文化と宿根木

佐渡の文化は、俗に「国仲の公家文化」、「相川の武家文化」、「小木の町人文化」に大別される。国仲のそれは、中世の頃から配流の島となり、順徳天皇、日蓮、日野資朝、世阿弥など中央からの流人の影響で形成されたものである。相川と小木は、戦国時代から近世初頭にかけて、金山と廻船による商品経済への移行が佐渡を大きく変えて、金山直轄地の「相川」と廻船港「小木」を成立させた。
宿根木は、「小木の町人文化」形成に先駆けて、中世の頃より廻船業を営む者が居住し、宿根木浦は、佐渡の富の三分の一を集めたと言われるほど栄えた。やがて小木港が江戸幕府によって整備され、商業の中心が小木港へ移行すると、宿根木の者は、船主が先頭となり十数人の船乗りと共に、全国各地へ乗り出して商いを続けた。村には船大工をはじめ造船技術者が居住し、一村が千石船産業の基地として整備され繁栄した。
その時代の集落形態が今日見られる宿根木の町並みである。村を流れる称光寺川と平行し、数本の小路が海へ向かい、それに面して家屋が肩を寄せ合い建っている。約 1 ヘクタールの土地に 110 棟の建造物を配置する高密度である。建物の外壁に船板や船釘を使ったものもあり、千石船の面影をしのべる。宿根木集落の特徴は、家屋の密集性にある。

主屋のみならず、納屋、土蔵が林立する様は、廻船による栄光とその衰退、出稼ぎと農林漁業への転換という歴史を映し、建物の利用の変化を見せてくれる。質素で静かなたたずまいを保つ宿根木の町並みも、一歩家の中へはいると目をみはるものがある。　公開施設となっている「清九郎」家のごとく、くぐり戸をはいった土間は、広くゆったりし、それに続く「おまえ」（居間）は、イロリを中心に広々している。また、赤黒く輝く溜塗りの柱、板戸、天井など、単に贅をつくしたとは言えない文化の積み重ねと生活の工夫のあとがうかがえる。

宿根木の村へ入り、そこに身を置いた時、忘れかけていた集落の機能、捨てようとしても捨てきれない文化の重み、いつまでも持ち続けたい家と家族の絆。そんなことがゆっくりと、そして静かに語りかけてくる。

2. 建物の特徴

宿根木の建物は、古くは平屋だったものを、階高を上げ総二階とすることで、接客空間を増やし、人が集まれる座敷を造ることを意識して体裁を整えていった。船持ちのような実力者がひとつの間取りを完成させ、次第に村内で取り入れられ流行していったと考えられる。

これには、屋敷地の狭さといった立地条件や、海とともに暮らす生活条件などさまざまな要素が関連している。

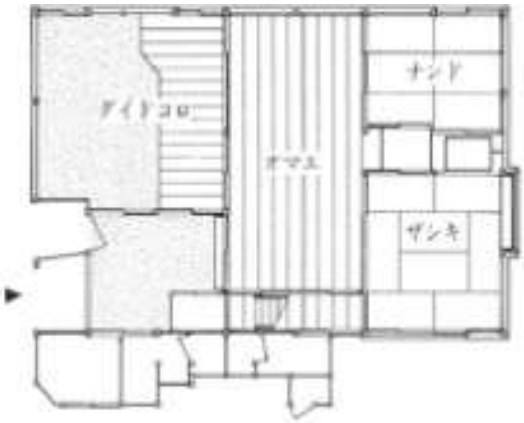
宿根木は、１ヘクタールほどの狭い谷あいに家屋が密集しているため、ほとんどの建物が総二階建てとなっている。外観は日本海から吹き付ける潮風から建物を守るため包み板と呼ばれる縦板張りとなっている。

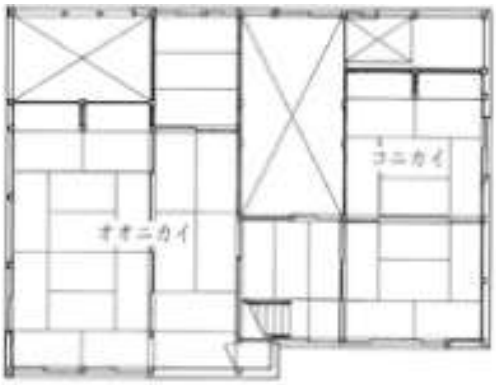
簡素な外観とは対照的に、内部は漆をふんだんに使うなど豪華な造りとなっている。

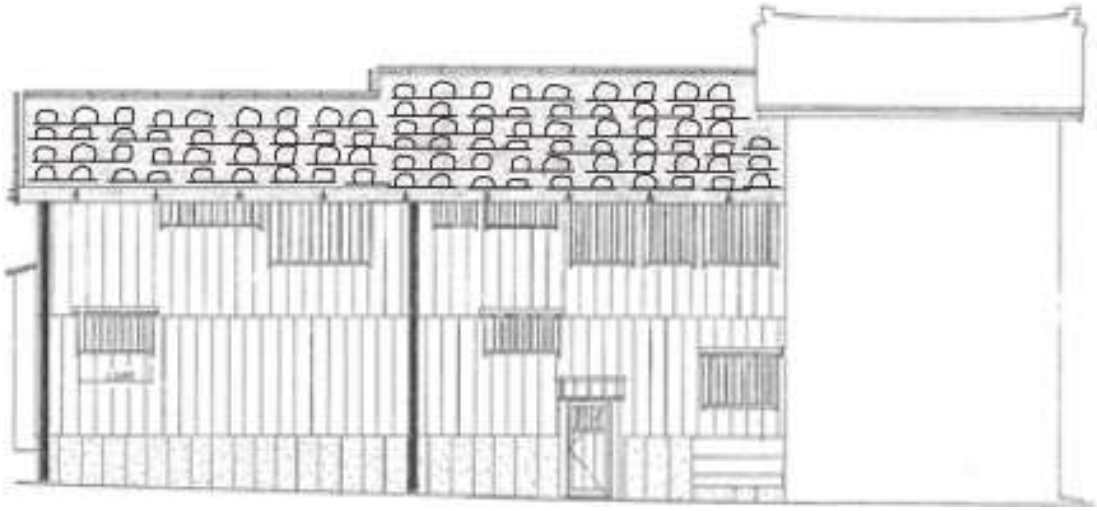
主に道具蔵として使用される土蔵は集落に 26 棟が現存し、一部に三階建ての土蔵も見られる。漆喰塗りの土蔵も全てサヤと呼ばれる杉板で覆われており、その多くが千石船で繁栄した幕末から明治にかけて建てられている。

屋根は、かつては石置き木羽葺きであったが、江戸時代に石見瓦が、昭和 30 年代に能登瓦が廻船で運ばれた。現在、主屋や納屋の屋根約 40 棟が石置き屋根に復原されており、特徴的な景観のひとつとなっている。

3. 様々な間取り







宿根木には町場で見られるような通り土間形式の建物は 1 棟も見当たらない。江戸時代になると人口流入による戸数の増加が進み、密集していったため、独自の間取りが造られると共に、様々な間取りが混在する形となっている。一階は、土間（ニワ）、ダイドコロ（カッテ）、囲炉裏のあるオマエ、ナンド、ザシキの順に配置される。二階は、オマエ上部は吹き抜けとなっていて、オオニカイとコニカイがトオリニカイ（通路）で繋がれており町屋造りの影響も受けている。

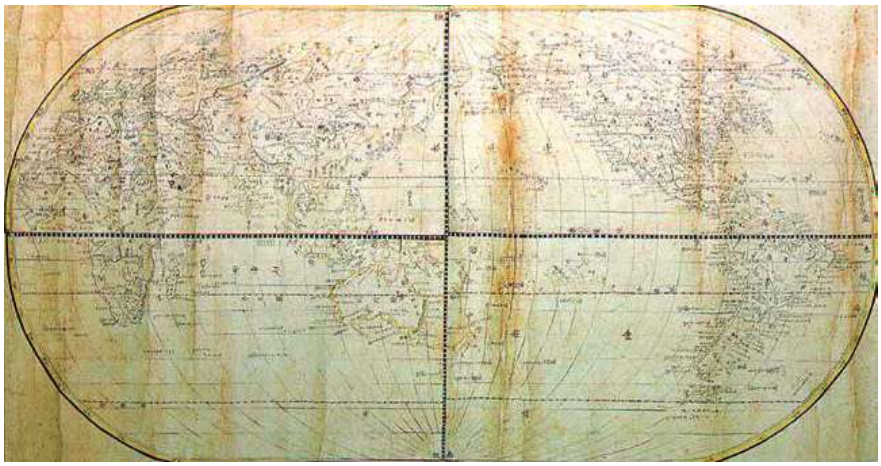
江戸中期になると、客をもてなすため二階に床の間のついたオオニカイ（ザシキ）を造るようになる。そのため、当初は平屋であっても増築で柱を継ぎ足し二階建てとしている家屋も見られる。平入りで前にナンド（寝室）を持つ形式から、次第に後ろにナンドを配置し、より「個」の空間を確保する形式に代わっていく。
宿根木の建物は、船大工が建てたといわれるが、その多くは、家大工が建てている。家移りや敷地の細分化は盛んに行われ、納屋を主屋、主屋を納屋にと転用を繰り返している。
これらは、日当りなど少しでも良い条件に移り住み、より快適な住環境を確保するためであった。今に残る伝統的建造物は、狭い谷に密集して暮らす宿根木の人々が考え出した智恵と工夫の証でもある。

4. 宿根木の歩み

宿根木は海に向かって開かれた集落である。西廻り航路の寄港地であった小木港から南西約４㎞に位置する宿根木は、江戸時代中頃から明治にかけて、日本海を舞台とする廻船業の基地として栄えた。
当時の廻船業は、越後の米を西廻りで大阪へ運び、大阪で塩や雑貨を仕入れて北海道で売るといった速さではなく、多くの港に立ち寄りながら品物の価格差で商いを行う買積船であった。
この頃の宿根木には 120 戸 500 人ほどが集住し、十人余りの船主のほか船乗りや船大工らが居住した。そのほか、四十物屋、桶屋、紺屋、鍛冶屋、石屋といった様々な職種が集まり、廻船業に加え造船基地として発展し、今に続く町並みの基礎を形づくっていった。家屋が密集する宿根木には、海に面した浜と谷奥に２つの広場を設けている。ほとんどの家屋は敷地いっぱいに建ち、小路と呼ばれる路地と接している。小路の大半は海に向かっており、大浜と呼ばれる広場に出るようになっている。
これは、大浜がかつて千石船の荷揚げ場、造船場であり、長きに渡って遠く北海道や大阪へ通じる玄関口であったからである。
もう一つの広場は、集落を流れる称光寺川の上流、現在宿根木公会堂が建つところにある。この場所は、明治初めまで称光寺の末寺４か寺を含む境内地であり、のちに旧岬村役場や小学校が開かれた村の中心地である。今も集落の拠り所として人々が集う憩いの場所である。
この２つの広場を含む谷内と台地の高山、やや離れて東側の高台にある宿根木新田の３つの地区が千石船の航海を支える集落として形成されていった。以来、海に接する港近くが第一の土地として重んじられ、谷内、高山、新田と順に土地の優位性が生まれていった。

時代は下り明治末年、蒸気船や鉄道が現れ電信の発達とともに、宿根木の廻船は次第に姿を消していった。多くの者は海を捨て、横井戸を掘り、高台に田地を開いていった。船大工は仕事を求めて集落を離れ、宿根木は出稼ぎの村となった。今は 60 戸 180 人ほどが静かに暮らす半農半漁の集落となったが、かつての賑わいは今も集落の至る所にひっそりと息づいている。

柴田収蔵の世界地図



柴田収蔵は文政 3 年（1820）

宿根木に生まれた。青年期には、幕末という歴史の転換期が迫りつつあることを敏感に受け止め、旺盛な向学心に燃えて江戸へ上り、苦学の道を進んだ。そして蘭学、医学、天文地理学を極めた。
その後幕府に士分けで奉職し藩書調所絵図取締役として、現在の国土地理院の仕事に類似した業務に携わった。
鎖国政策の中で常に世界に目を向けた進歩的な学究態度は宿根木の先駆的人物として、今日も人々に尊敬され親しまれている。

ちとちんとん（新潟県指定・民俗文化財）

宿根木鎮守の祭り(10 月第 2 土曜日曜）に奉納される芸能である。そのむかし当村の廻船が長州山口県「つの島」の難所を通過する時、初めて乗船した若者が、初航海の習俗として船玉明神に奉納した安全祈願の踊りが「ちとちんとん」発生の起源だと伝えている。

「ちとちんとん」は、赤鬼と青鬼の舞、祭文読み、ちとちんと呼ばれる男役、とんという女子役、さらに笛、太鼓、拍子木のお囃子で構成されている。古代の伎楽に性的要素が誇示されているが、おおらかに、楽しく祭りを盛り上げている。

重要伝統的建造物群保存地区データ

選定日　　平成 3 年（1991）4 月 30 日
環境物件　　108 件
建築物　　220 件（うち伝統的建造物 107 件/工作物 16 件）地区面積　　28.5ha
選定基準　　伝統的建造物群及びその周囲の環境が地域的特色を顕著に示しているもの

参考文献

宿根木村誌（1947）
南佐渡の漁撈習俗（1975）
宿根木伝統的建造物群保存対策調査報告書（1981）
宿根木の町並と民家Ⅰ・Ⅱ（1995）
宿根木を愛する会ホームページ

＜ＬＦＪブックレヴュー 86＞

『ソール・ライター　＜百周年回顧録＞』　Ｍ・アープ／Ｍ・パリ―ロ著

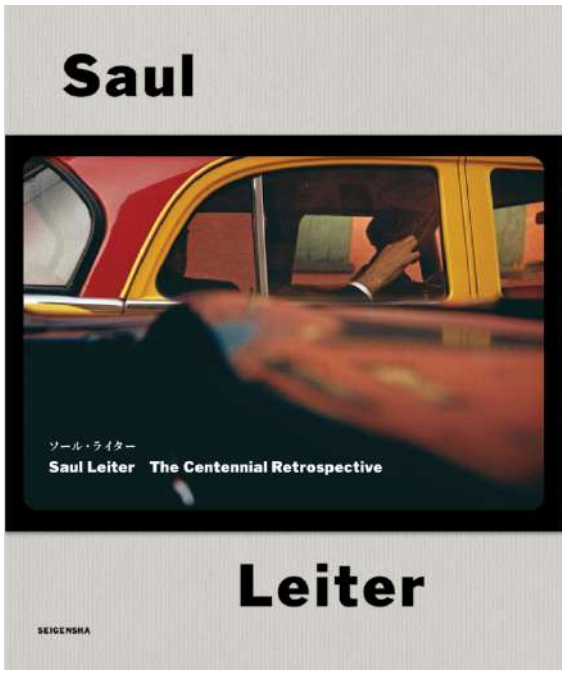
2023 年　青幻舎刊

斉藤全彦

タブロイド判を若干小さくしたような 350 ページもある大きな写真集（260x310mm）である。そして、ソール・ライター（1923-2013）という写真家の名前はあまり有名ではないらしい。。写真家としてマン・レイ（1890-1976）やアンリ・カルティエ＝ブレッソン（1908-2004）などは良く耳にする名ではあるが、ソール・ライターという名は死後有名になった感がする。彼は生前 50 歳ぐらいまでは、『Vogue』『Queen』『Esquire』『NOVA』などの雑誌でファッション写真を撮り、『LIFE』『U. S. Camera』などの各誌にも写真が掲載されていた。そして 1980 年代からは商業写真はやめ、所謂「写真家」となる。2005 年ニューヨークのハワード・グリーンバーグ・ギャラリーで「Saul Leiter : Early Color」展が開催され、2006 年ライター最初の写真集『Early Color』が出版される。なんと彼は 83 才になっていたことになる。

写真集を評論するのは大変難しい。先ず、写真を見てください、というほかない。文章というものは観念である。しかし、写真は観念ではなく、人間の目から入る表彰であり、静止画像である。世界の瞬時を捕らえた写真から見た画像である。カメラを持ったその人が捕らえた唯一の瞬間である。ソール・ライターは女性誌を専門とする商業写真家として半生を費やしたにもかかわらず、もともと彼が持っていた類まれな目が捕らえた世界の瞬間がそのカメラに捕らえられているのが徹底されている。商業だろうが何であろうが、ニューヨークの界隈をきめ細かくソールの目で追いかけられてゆく。ソール・ライターの写真はすべてこのニューヨークの彼が住んでいた界隈数キロの中に埋没されている。それながら、何とこれらの瞬間瞬時は”自由”と称する感覚を持ち合わせているのであろうか。彼はまさにニューヨークを生きた景観と捉えたのではないか。

先ず、「はじめに」ではソール・ライターの出自が画像を中心に解説される。両親は 1920 年にアメリカに移住してきた。父は 1891 年ポーランド生まれのユダヤ人で、ユダヤ教正統派の有名なラビで長く続くラビ家系の出身であり、母は 1894 年オーストリア生まれの普通の移民である。ソールは父の職業を次いでラビになる筈であったが、親の意に反し写真家になった。そのことは、親族とは全く付き合いを絶った孤独な人生を歩むことになる。第１章「発端」ではソールがソールたらしめているもの即ち「ソールは野心を抱かないという、野心を貫いた類まれなアーティストだった」ということを人間関係から解き明かす。第２章「街路にて」では「日常に潜む迷宮を静かにとらえるソールの真骨頂」を示す。第３章「ファッション」では「ライターは本質的な美のイメージを追求したいという情熱からファッション写真に挑んだ」という。第４章「絵画」では、「具象と抽象の狭間に創造した小さな場所でソールは絵に守られて眠っている」という。第５章「親密な眺め」では、ヌードをとうして彼の私生活を考える。これらのコメントはそれぞれ異なる５人の作家や画家等によって論じられている。ソール・ライターはまさに死者になってから諸々の文化人を刺激し語らしめている。これからが、ソール・ライターの活躍の場となるのではないか。



〒150-0031
東京都渋谷区桜丘町 14-5-502
TEL : 03(3780)3814
FAX : 03(6379)6681
E-mail : info@keikan-forum.com
URL : https://www.keikan-forum.org

Landscape Forum of Japan